

カナリヤの遠声

小林

稔

(天は翼を叩つかせ)

(遠いところで光を編む大車輪)

天の航路を水平に指を突き出す切り岸

走るほくのさらに走る地の涯は行き止まり

ほくの咽喉はさざめく銀の波動に慄え立ち

わななく心臓を抑えいま一度

燃える水脈が脊椎に昇るのを待つ鷹の耳

海霧に数百の海鳥が消えていく

ほくの肉が慄え摺えずして摺える声を聴く

薄明、船を岬へ駆り立てた

岬と知ればすぐさま訣れる旋回とともに血液は引いて

ほくの肋の痠響が踏み砕き打ちのめ才籠のカナリヤ

抉りのぞかれたほくの眼孔の覗く玻璃石

いまほくの立ち竦む断崖に虹が差し出され

頭髮は逆立ち、ほくの脳髓が聴いた扉の軋む音

雪崩れこむ光に宝石がいっせいにきらめき

記憶の回路、なけなしの鉞脈を掘り

送電線の鉄パイプは避雷針と結ばれていてた

ブラッシーの泡の飛沫に爆音を聴き

眩しい夏の射光にしかめるぼくの顔面が捕えた世界の終り

その日、ぼくは父が植えたヒヤン sns を切り

ぼくの膝に落ちた葦の水滴、頭上の樹樹のそよぎに

ぼくの肉が羽搏き腕き裂く癩癩

終るともない戦争、待ちくたびれた大洪水、塵ばむ嵐を

砂漠を歩む蟻のようにぼくは見る

頭腦の群集の織りなす眼差の檻で

ぼくは眩暈、ぼくの影を踏む青年はうしろむきに旅立つ

目覚めては魔界、目覚めては汀線

走るぼくの走る地の涯は行き止まり

おり、またも三半器官を暴風雨が襲来する

砂塵砂塵を滑走するか天使は膝を曲げそのまま接近

髪振り乱し老年の童顔を突き出すぼくの正面

ぼくは数千の少年を殺してきたんだ

それはすべてなされたようになされた

きみの歯噛みに一瞬見える青空

きみの聴こえない声、突き刺す拒否の声

声は一ミリの狂いもなくぼくの心臓を狙う

戸口に立て掛けたシャベルがぼくの掌を牽きもたげると
きみの顔の光が闇を呼んだ

ぼくがきみを倒した

ぼくの知らない存在の眼差がうしろを射ちぬいた

地がものすごい叫びをあげ、砕砕にぼくをする

走るぼくの走る地の涯は行き止まり

大地の洗われた胸をきつく氷塊が縛しまめるなかを

日輪が没なちていく、もう永遠に明けることはないだろう

朱色に朱色を馴染ませ、一瞬ののちは歓喜の夜

ぼくの喉から鶯は堰を切って流れ止めなく

どこまでも響き亘る渾沌

ぼくの平衡感覚は破れ、鼓動は宇宙の循環を満たそうとする

だが癒されることのないぼくの渴きよ

砂漠に掘る井戸のように脳髓の林を分け入れれば

湧き出る泉が夜を讃えている

波立つ水面に口つけようと腕き眼差を落せばもう一つの眼差

あやうく唇を引き離す

おり、おどろこちらを睨む白狼、すでにぼくは白狼

月がぼくの烙印をさらに刻み

伸びる根毛が地の深みを目指すぼくの神経の樹

記憶を削いだ樹の空洞の祭壇に星が灯される

するとそこから声が立ちあがる

△われは時間の大河に停止する者

△われは生きることを求めすぎた者

△われは未知の場所を彷徨う旅人なり

△われは無垢

△われは孤独を知り給う

△われの喉の渴きはどのような深い井戸も潤れるだろう

△われは闇に深い、闇の奥に光を探す者

さらに走るほくと鎮座するほくの友の隔りに声は凍みる

おう、折るほくは突然唇を裂いて言う

熱れた果実が地を赤くした、と

おう、ほくは白狼、走るほくのさらに走る地の涯は行き止まり

夜もなく記憶は泡のように消えすべての光が消えかかる森の誰彼

うしろむきに速さがる人人の肩に触れようとして

触れず後退る、ほくは海の最期の一吹きで消され

走るほくの走る地の涯は行き止まり

ほくの慄える咽喉から虹が燐れ出る

いまほくは飛ぶ幻と溶ける約束の目の世界を裁き